性愛と民主主義
――1945~60 年代前半における夫婦関係の表象――

○本多　真隆（明星大学）

１．問題の所在

1954 年に法社会学者の川島武宜は、敗戦直後に「性」に関する言説が湧出したことについて、以下のようにのべている。

> 敗戦によって旧来の政治権力の崩壊とともに……「幸福追求」と基本的人権という新しい価値観念が、政治における民主主義体制に勇気づけられ、そのような一般的条件の上で、性や結婚における快楽主義的価値観念が成長した。……性道徳における「解放」は、価値観念の平面におけるシニシズムを含んでいる。……性の抑圧による人類のエネルギーの転換（性の「昇華」）が真に広汎な大衆の幸福のために行われる場合にはじめて、それは民主主義的な価値観念によって是認され得るものとなるのである。（川島 1954: 222-9）

見田宗介は、戦後から 1962 年までのベストセラー本を分析するなかで、「恋愛とセックスに対する関心」が継続的に上位にあったことを指摘している（見田 1965）。この時期の「性」として焦点があてられたもののひとつは、1946 年刊行の『完全なる結婚』、1940 年代後半～50 年代中旬の夫婦雑誌、1960 年刊行の『性生活の知恵』などに象徴される、夫婦間の性愛関係だった。

戦後初期の夫婦間の性愛関係については、「夫婦間性行動のエロス化」の拡大（赤川 1999）、夫優位の「セクシュアリティの二枚舌構造」の形成（田中 2014）、など、当事者間のセクシュアリティの問題としての研究が蓄積されている。だがこの時期の「性」に関する言説は、それ自体で独立していたのではなく、戦争体験や戦後の社会混乱、民主化など、同時期の社会変動と密接に関連して語られていた。本報告は、夫婦間性愛に影響を与えた社会的、文化的な変動に即しながら、1945～60 年代前半におけるそのイメージ、語られ方の変遷を追う。

２．対象と方法

資料については、1945~60 年代の家族論が網羅的に収録されている、太田武男ほか編『家族問題文献集成』の「性」、「結婚」項目の所収論文のほか、同時期の性愛に関するベストセラー書籍や雑誌、そしてこれらの議論を主導した主要論者による刊行物を主な対象とする。分析にあたっては、夫婦間の性愛関係が当事者同士の関係にとどまらないかたちで、どのような社会批評、社会構想とともに論じられていたか、という点に焦点をあてる。

３．考察

戦後初期において夫婦間の性愛関係は、家制度の批判、民主化、新たな倫理の形成とセットで語られる傾向にあったが、徐々にそうした志向は薄まっていった。報告では、当時の議論の限界とともに、現代における親密圏と「公」の問題についての示唆についても部分的にふれたい。

<参考文献>

赤川学, 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房.
川島武宜, 1954, 『結婚』岩波書店
見田宗介, 1965, 『現代日本の精神構造』弘文堂.
田中亜以子, 2014, 「『感じさせられる女』と『感じさせる男』―セクシュアリティの二枚舌構造の成立」『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会, 101-26.

（キーワード：近代家族、夫婦関係、性愛）